小・中学校の単元間の系統性を意識した中学校入門期における指導への提言

学籍番号　219302
氏　　名　大脇 裕也
主指導教員　加賀田 哲也
副指導教員　箱崎 雄子

１．研究背景

今回の学習指導要領では，小中高の一体化された外国語教育が求められている。しかし，小学校は2020年より，中学校は2021年より教科書は一新され，教師は目の前の教材研究で精一杯な状態にある。現行の指導要領が全面導入となった初年度は小中連携の在り方を模索すると言うより，なんとか一年を乗り切ったという状況であっただろう。本研究では，そのような学校現場の状況を目の当たりにしてきた筆者が第三者の立場で学校現場へ介入し，小中連携へ向けた取り組みに対する実態はどうであるのか，また，小中連携へ向けてどういう視点からアプローチが必要とされているのかについて客観的に分析することで，今後の小中連携に向けた視点を考案する。

２．小中連携を困難にしていると考えられる要因

本研究において，小中連携を困難にしている要因は 3 つあると考えられる。その 1 つは，小中学校の教員間で教科内容について引き継ぎをするための時間が十分に取れないことである。例え時間を取ることができたとしても，どこに焦点を当てて話し合えばよいのかについて考えるところから始めなければならない。複数の小学校から中学校へ入学してくる場合にはより一層時間を割く必要があり，引き継ぐ視点の焦点化が求められる。

2 つ目は，中学校教員が小学校外国語の内容をあまり把握できていない点である。小学校外国語の内容を基盤として中学校外国語の指導をする必要があることは，中学校教員の中で意識されている。しかし，小学校外国語が教科となって日は浅く，中学校教員にとって小学校外国語の指導をイメージすることは簡単ではない。また，学習指導要領の改訂により中学校現場も未だ混乱している中で，小学校外国語の内容にまで教材研究が及ばないといった現状がある。小学校卒業時にどういう資質や能力が身についているのかを一見してイメージすることができるような指標が求められる。

3 つ目は，小学校教員が外国語をどのように指導してよいのか困っている状況にあるという点である。小学校は担当する学年が毎年変わることが多く，2 年以上継続して教科指導することは難しい。特に外国語においては系統的な指導を心がけたり，卒業時にどういう資質や能力が身についていればよいのかについて意識したりすることは現状困難である。「どういう目標に向かって指導していけばよい」のか，「今指導している小学 3 年生から小学 6 年生の教科書

内容がどのように児童の力につながる」のか，それらの目標を明示的に示されることが求められる。

３．卒業時の児童の姿の設定

小学校４年間で学ぶ語句や表現から，９つの状況において使用できる表現としてまとめたのが卒業時の児童の姿である。これらを学習到達目標にすることで，小中学校間で共通理解を図ることができ，小小連携においてもその活用が期待される。また，これら９つの姿に向かって系統的に指導できるよう，以下のような教員用チェックリストを小学３年生から中学１年生まで作成した。小学校では各単元で学ぶ表現が「児童の姿」にどのように結びついているのかについて意識することができ，中学校ではこの９つの姿を授業に取り入れ，小学校の題材をリサイクルして指導する際に活かすことができるであろう。

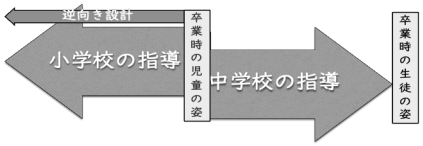

図　児童の姿から考える指導イメージ

表　小学３年生 “*Let’s Try 1*（文部科学省）” Unit ５の項目例

Unit	☑	前回	３年生	次回	パ
3U5	☐	3U4	What do you like?	3U7 5U7	A
	☐	3U4	What sports do you like?	3U7 5U1	A
	☐	3U4	I like tennis.	4U1	A
	めざす児童の姿Ａ「自己紹介をする表現」でそのまま使用できる表現です。What で両方の掌を空にむけ，do you like で両手を相手に向けるなど体を動かしながら指導するとよいでしょう。				

４．課題と展望

本研究で作成した卒業時のめざす児童の姿は，中学年で “*Let’s Try*” を使用し，尚且つ高学年は “*New Horizon Elementary*” で指導したことを前提としたものであるという点には留意が必要である。教科書が改訂されれば内容を変更する必要があることは，課題として残る。しかしながら，卒業時のめざす児童のＡ～Ｉの９つの姿については，2024 年度以降の教科書改訂後は現行と同じような表現が使用されることが予想されるため，これらを参考に改めて系統立ててみるとよいと考える。

今後の展望として，「児童の姿」を共有することで，小学校教員の指導時の不安がどれほど軽減できるのか，また，小学生が４年間で外国の言語や文化に興味を持ち，英語力やコミュニケーション能力の基礎をどれほど身につけることができるのかについては，今後，調査する必要がある。また，「児童の姿」を通して語句や文，及び文構造に関しては連携を図ることができたとしても，強勢やイントネーション，英語特有のリズム及び文字指導の連携に関しては課題が残る。今後は，小学校で使用される語句や表現といった言語面だけではなく，音素やリズム，ストレス，イントネーションといったプロソディー，さらにはフォニックス指導も視野に入れた小中連携について考えていく必要があると考える。